

令和 7 年 6 月 9 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K00549

研究課題名（和文）名詞句の意味と解釈に関する日韓対照研究

研究課題名（英文）A Contrastive Study on the Meaning and Interpretation of Noun Phrases in Japanese and Korean

研究代表者

金 智賢（Kim, Jihyun）

宮崎大学・国際連携機構・教授

研究者番号：40612388

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代日本語と韓国語の名詞句の特徴を、意味論的・語用論的な対照分析によって解明することを目指し、多様な要素と結合する名詞句構造や、名詞句が単独でまたは述語として用いられる発話文を、主に日韓対照の観点から分析した。分析結果から、述語や発話文の名詞化という観点では日本語の方が韓国語より活発に行われていることを確認したが、特に日本語に特徴的な動作性名詞の働きを対照的に記述した。名詞句の構成要素であるノとuy、数量詞を含む名詞句等を対照分析し、日韓の違いを明らかにしているほか、名詞止め文など多くの名詞的表現における日韓の違いには両言語のコピュラ構造の違いが関わっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来の日韓対照研究で注目されていた、所謂「名詞志向性・動詞志向性」という性質と関わる両言語の違いを最も顕著に示していると思われる「名詞」に焦点を当て、多様な名詞的表現における両言語の意味的・語用論的特徴を記述した。単に、名詞が多いというのではなく、動詞が自然なところに名詞が用いられる動作性名詞述語の働きや、名詞止め文における述語の機能などを対照分析することで、名詞志向性の内実を究明しようとした。なお、先行研究がほぼ皆無と言える数量表現の日韓対照分析、名詞的表現が韓国語より日本語に多いという現象の根底に、両言語のコピュラ構造の違いが存在することの解明は、類型論に示唆するところも大きい。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate the characteristics of noun phrases (NPs) in modern Japanese and Korean through a contrastive analysis grounded in semantics and pragmatics. Focusing on NP structures that combine with various elements and utterances in which NPs function either independently or as predicates, the analysis adopts a Japanese-Korean comparative perspective. The findings reveal that nominalization of predicates and utterances is more prevalent in Japanese than in Korean. Particular attention is given to the contrastive description of action nominals, which are especially characteristic of Japanese. The study also examines contrastively the Japanese particle "no" and the Korean "uy", as well as NPs involving quantifiers. Moreover, it demonstrates that differences in copular constructions between the two languages significantly contribute to the variation observed in nominal expressions, including so-called "noun-final" sentences.

研究分野：日韓対照言語学

キーワード：名詞句 韓国語 日本語 意味論 語用論 対照分析

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語研究においては、日本語の名詞句の重要性への認識が高まり、日本語の名詞句と関連構文を意味論的に捉え直した西山(2003)、日本語の述語に名詞が現れやすいという特徴に注目し、関連現象を取り上げた新屋(2014)など、名詞句研究の意義や必要性が唱えられるようになっていた。一方、日韓対照研究では、名詞志向の日本語と動詞志向の韓国語というフレームの中で、両言語が論じられることが多かった(林八龍 1995、井上・金河守 1998、生越 2002、金恩愛 2003、堀江・パルテジ 2009、塚本 2012 など)。ところが、日韓対照におけるこのようなフレームは、名詞表現の日本語に動詞表現の韓国語が対応するなど、表面的な言語現象の観察によるところが大きく、両言語の異なる志向性を前提としている先行研究は多々あるものの、その志向性の内実や背景にある言語本質的な違いを追究するものは、管見の限り皆無だった。類似した構造を有するとされる日本語と韓国語の違いの一因を名詞志向・動詞志向という性質に求めること自体は有効なアプローチであると言えるが、その性質の十分な吟味、背景にある言語構造的な違いの精緻な記述が求められる。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、現代日本語と韓国語の名詞句の特徴を、意味論的・語用論的な対照分析によって解明することを目的とする。名詞句は、その内部意味構造ならびにそれが生じる文中における意味機能という二つの観点から考察される必要がある。本研究では、前者として多様な名詞句構造を取り上げ、後者として名詞句が単独でまたは述語として用いられる発話文に着目し、日韓両言語の類似点と相違点を総合的かつ体系的に記述することを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究課題では日本語と韓国語の多様な言語場面から集められた実例、大規模自然言語コーパスなどを対象に、量的かつ質的な分析を行った。コーパスは、主に日本国立国語研究所のKOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(日本語)、韓国国立国語院の21世紀世宗計画「21世紀世宗コーパス」(韓国語)を用いた。研究分担者と研究協力者よりその他の言語資料の収集及びデータの確認、理論的な検証等を得ながら、研究代表者が分析、学会発表、論文執筆等を取りまとめた。

### 4. 研究成果

(1)「名詞(N1)+名詞(N2)」構造の名詞句は、日本語では「の」の介入が必須であるのに対し、韓国語では助詞などが表れないタイプ( )、「uy」の出現が任意のタイプ、「uy」が必要なタイプに分かれる。このうち、「uy」の出現が任意のタイプにおける「uy」の使用条件やその有無による意味の違いに関しては多様な先行研究があるものの決定的な議論がなかったが、本研究では西山(2003)等で提案された名詞句の意味論を適用し、新しい説明を試みた。第一に、N1が指示的な場合とそうでない場合とで「uy」の有無による分類が異なり得ることを指摘した。また、「uy」の使用が任意の名詞句はN1が指示的であるとし、この場合は、従来提唱されていた項目連結性(collocability)などによって「uy」の使用条件が説明できるが、「uy」の有無による意味の違いは当該名詞句の意味構造のタイプによって異なり、名詞句の意味構造がタイプ[A](N1と関係Rを有するN2)なら「uy」の有無で異なる意味を有し、タイプ[D]や[F]なら意味の違いがない等を突き詰めた。さらに、「uy」と「の」はN1とN2が何らかの関係を有することを示すという点では共通しているものの、その機能に殆ど制約がない「の」に対し、コンピュータ関係にある名詞を結びつけない等厳しい制約があることを、「冷麺のお客様」等のような名詞句の対照分析から明らかにした。

(2)「到着の電車」のような、韓国語では「uy」を用いた名詞句にならない「VNのN」タイプの名詞句は、日本語の特徴的な名詞句構造である。本研究は、このタイプの名詞句が日本語のコピュラ構造をもとにしているものと分析した。「XはYだ(太郎は学生だ)」は「YのX(学生の太郎)」と言い換えられ、「YのX(学生の太郎)」はコピュラ構造に基づいていると言える。要するに、「到着の電車」は「電車は/が到着だ」というコピュラ構造が可能だからこそ言える構文であって、韓国語は、「N-nun/ka VN-ita」というコピュラ構造を構成できないため、「VN uy/in N」という名詞句構造も存在せず、「VN」即ち「到着した電車」のようにしか表せない。このような

日韓の違いは、名詞志向の日本語と動詞志向の韓国語という議論を支持する現象の一つとされるが、それが両言語のコピュラ構造の違いに結びついているということはこれまで取り上げられたことがなく、本研究の主要な成果と言える。

(3)数量詞を含む名詞句も日韓で異なる様相を呈する。ところで、数量詞は名詞句のみならず、副詞的な表現とも関係があり、語順(数量詞遊離)や文の情報構造等とも複雑に関わる現象であることから、名詞句に限らず、両言語の数量詞表現を幅広く観察した。即ち、「\*三学生が」(韓国語では可)「三人の学生が」「学生三人が」「学生が三人」(韓国語では場合によって不可)「三人学生が」(韓国語では不可)等の形式を観察対象とし、副詞性・名詞性、限定性・制限性、全体性・部分性、情報構造・焦点性、コピュラ構文との関連性等の意味要素を手掛かりに対照分析を行った。その結果、日本語の数量詞は副詞を、韓国語の数量詞は名詞を中核とする構造であることから両言語間でズレが生じていることを突き詰めた。さらに、数量詞構文は意味論的に存在のコピュラ文をもとにしていることから、日韓両語の代表的な数量詞構造はコピュラ構造と連動している可能性について追究した。

(4)節を含む名詞句のうち、「何じゃこりゃ状態」のような直接引用形式の発話文が名詞と結合している構文を対象に対照分析を行った。日本語も韓国語も発話文の直接引用は頻繁に行われているが、発話文が引用表現なしで名詞を直接修飾(複合名詞化)する現象は日本語の方が圧倒的に多く、主名詞も多様化する傾向にある。さらに、直接引用の発話文と主名詞の意味関係には、当該発話文と直接結びつく名詞という意味を表すもの、内容節の内容を直接引用形式にしているようなもの、キャンペーン等の内容を発話文形式で表わしているもの等があり、どれも生産的で特にの使用が拡大している日本語に対し、数少ない韓国語の例はに限られるという違いが観察された。これは、一次的には、節が名詞を修飾するとき節の形が変わらず引用形式がつく日本語と節の述語が連体形になる韓国語という形態論的な特徴により、日本語の方が発話文形式のまま名詞につきやすい環境にあるという事実起因する。ところが、の拡大の背景には、直接引用の談話効果に対する両言語の認識差、文化的な側面等が存在するものと考えられる。この点は今後の課題であるが、当該現象は日本語の「磁石」的な特徴と韓国語の「チェーン」的な特徴の一面を示しているものと言えそうである。

(5)名詞が裸の形で述語に現れている名詞止め文は、名詞志向性の判断基準の一つになれる。名詞止め文が韓国語より日本語に多いことは従来から指摘されていたが、本研究では、その背景にどのような言語構造的な違いがあるかに焦点を当てて分析を行った。生越(2018, 2020)に従い、名詞止め文をA.名詞+は/nun+名詞、B.連体修飾語+名詞、C.連用修飾語+名詞、D.名詞一語の四つのタイプに分け、それぞれにおける分析を進めた結果、両言語の異なるコピュラ構造が名詞止め文の異なる様相を生み出していることを追究した。これらのタイプは形態上の分類であるため多様な意味構造を有しているが、どのタイプもコピュラ構造がベースになっている場合は、名詞止め文は日本語にしか現れず、韓国語は慣用化した一部の表現を除けば名詞止め文を構成しない。これは、韓国語では文法レベル(筆者の議論・定義による)におけるコピュラ文はコピュラ「ita」の言語化が必須である点、日本語は文法レベルと発話レベルのどちらにおいてもコピュラ「だ」を有しないコピュラ文が可能である点、等の特徴によるものである。

(6)名詞一語、または、形容詞の修飾を受けるシンプルな名詞句からなる文(「名詞一語文」)がどのように用いられているかについて、日韓両言語に英語を加えて対照分析を行った。述語が中心となる日本語や韓国語に対して伝統的に名詞的な言語とされてきた英語を分析の対象に取り入れることにより、少し異なる観点から名詞志向性の内実を吟味することが可能になる。分析は、尾上(1998)、生越(2002)で取り上げた場面の区別を参照し、話し手が何かを発見したり感じたりした時点からその発見したものを発話にするまでの時間幅によって発話の場面を、発見とほぼ同時で判断の入る余地がない場面、発見から時間が経って話し手の判断が可能な場面、日常会話における判断の場面に分け、各言語における名詞一語文の許容度を観察した。ではどの言語も名詞一語文が可能で、では日本語のみが名詞一語文を許容し(ただし、韓国語と英語とで名詞一語文がダメな理由は異なっている)、は英語の名詞一語文使用率が高くなる。名詞一語文が使えないとき、韓国語は述語のある文を、英語は特殊な名詞文を用いる傾向が見られた。この結果からすると、韓国語が最も動詞志向的で、日本語と英語は違うレベルで名詞志向的であると言えるのかもしれない。この議論は基礎的な観察に過ぎないが、名詞志向性には多様なアプローチが必要であることを示唆するものである。

(7)本研究課題では、名詞句の内部構造へのアプローチとして「N1+N2」名詞句、数量詞句、直接引用を含む名詞句等を、名詞句の文中における意味機能へのアプローチとして名詞止め文、数量詞句、名詞一語文等を取り上げ、主に意味論・語用論的観点から、幅広い対照分析を行った。特に、日韓で異なる様相を呈する名詞句関連現象の背景には、コピュラ構造等言語構造の違いが存在していることを明らかにした。個別研究の中で新たに発見した課題も多々あり、今後につながる研究となったことも本研究課題の意義の一つである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 金智賢	4. 巻 /
2. 論文標題 日韓コピュラ構造の相違がもたらす「不完全な文」の様相	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会言語科学会第48 回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 374-376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金智賢	4. 巻 100
2. 論文標題 発話文の直接引用に関する一考察 日韓対照分析を視野に入れて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Jihyun Kim and E. Michael SCHAUERTE	4. 巻 98
2. 論文標題 A Contrastive Analysis of the Sentential Use of Noun Phrases - Focusing on the Japanese, Korean, and English Languages -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金智賢	4. 巻 255
2. 論文標題 「AはBだ」から「BのA」へ いわゆる属格助詞の日韓対照を兼ねて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 (47)-(88)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓両語のコピュラ構造と「名詞的」特徴について
3. 学会等名 第43回「日本語と外国語との対照言語学的研究」 日本語・韓国語・名詞（招待講演）
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓数量詞構文の意味論
3. 学会等名 対照言語学研究会第8回例会
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日本語と韓国語の連体修飾構造に関する対照研究 「到着の列車」タイプの名詞句を中心に
3. 学会等名 タイ日シンポジウム・研究発表会2024（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓両言語の名詞性とコピュラ構造について
3. 学会等名 対照言語学研究会第7回例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓コピュラ構造の相違がもたらす「不完全な文」の様相
3. 学会等名 社会言語科学会第48回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓両言語の「文体」と名詞性
3. 学会等名 対照言語学研究会第6回例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓数量詞表現の対照分析
3. 学会等名 第7回朝鮮語教育学会・朝鮮語研究会合同大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓両語の名詞化と連体修飾に関する一考察
3. 学会等名 対照言語学研究会第5回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 直接引用と名詞修飾に関する日韓対照分析 「何じゃこりゃ状態」類の表現を中心に
3. 学会等名 韓国日本語学会第48回国際学術発表大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 対照言語学と複言語主義の接点
3. 学会等名 公開研究会 CEFR2001, CEFR-CVと仲介, 複言語・複文化 日本語と外国語
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日韓の拡張型コピュラ文について
3. 学会等名 第268回朝鮮語研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Jihyun Kim
2. 発表標題 The semantic structure of genitive noun phrases and the meaning of uy in Korean: A contrastive study with Japanese
3. 学会等名 The 22th Meeting of the International Circle of Korean Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 動作性名詞述語文の日韓対照研究
3. 学会等名 日本言語学会第161回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小熊 猛  (Koguma Takeshi)  (60311015)	金沢大学・外国語教育系・教授    (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------